

二十八日からオーストリアに旅行するので、明晩日本料理を作るから、是非送別に来るようにと手紙が来る。返書を出す。

〔七月二十日見聞記事〕

私たちは、午前四時にターラントを出発した。写真機械は各自分担し、ヒンテルダルフ村から、密生した日本の竹林のようなターラント森（モミ、トウヒ）を一里程通り、ラントベルグ村の一茶店で朝食を命じた。時に午前六時。机の上には草や砂が撒き散らしてあって、椅子は無く、板の腰掛け（しかも神代もの）は傾いた差掛け小屋の下に据えられ、去年の暮れに煤取りしないまま、箒は御無沙汰という。一時間ほど待って、黒いパンとコーヒーが来た。しかし、盆はなく手で持つて来るため、黒い指がコーヒーの中に浸入してゐる。もしもこれが茶ならば、黒く色がついて不便であるが、コーヒーは黒いため、何か色がついても知らぬ者は仏であるが、私はよく注目していたので、飲むには堪えなかつた。

この家は海面からの高さは四百三十三メートルで、ターラントよりも百二十メートル高い所にある。

午後四時頃、私たちは六七里の道を歩き疲れたため、クルメンフルース村という所の茶屋で二時間程度休んだ。料理屋の様子は前と同じで、ここには机の上に鰯の塩漬の汁などが流れており、砂や草より一層汚穢であつた。しかし、日曜なのでここには多くの人が集まつていて、鳥射の始まる所だったので、このように長くいた。道の傍らに日本の緑日（「そう立派で綺麗でなく」）のような戸板を並べ、桜の実やパンを売つていた。

パン屋の戸板には何かがあるかというのと、二ヶの醤油樽のような桶に鰯の酢漬を満したものがあり、これをパンの間に挟んで売るのである。大きな樽の方には一匹五ペンニツヒ（二寸五分位）のものを、三ペンニツヒで売つており、見る見る内に半分過ぎまで売れてしまつた。その鰯は頭も骨も皆食べられ、甘露甘露と言ひうもののものである。また一本の肉差しが戸板の上にある。これは田舎紳士の所用とみえて、少し綺麗な洋服の紳士は、流石に酢のだから流れるのを手ではつかまず、この肉差しを使つて樽の中から直接口の中に入れ、その肉差しは洗わず直ちに樽に入れ戻し、

また次の紳士が使うようになってゐる。

ここに群集する男女を見ると、十分の三は無帽、無靴の女で、帽子を被るものは少なく、大抵日本の四角形の襟巻のような古布を被つてゐる。銭ざるの中が赤色なのをみれば、主に銅銭が通用して、ニッケルの銭は少ないのである。私は悪口だけを言うようであるが、市街が立派であることの記事は何人も既に承知しているが、片田舎の有様に至つては知るものも少ないので、この点詳しく記しておくのである。

洋行日誌 第十三報 自二十三年七月二十六日

至 同年 八月 十日

（●第百二十六日目）

七月二十六日 土曜日 晴

授業なし。八時起床。六月二十三日発の銚子からの書状並びに新聞が届く。久し振りで日本の事情を知ることができたので面白かつた。午後二時に第十二報を出す。夕食前、前郊を散歩し、九時就寝。

今日のフライベルヒの日本食会は、葉書で辞退し行かなかつた。何故ならば、最近余り旅行が過ぎるからである。

（●第百二十七日目）

七月二十七日 日曜日 快晴

終日一点の雲なし。近來希なる好天気。午前七時起床。八時から十時まで教会へ行く。午後四時からシミット、ヒルトネル、ゲルトネル三氏と散歩し、炭小屋でシミット氏が写真を写す。それからフットハウスという茶店でビールと菓子を食べ（日本のカステラのような菓子）、七時頃帰宅

する。

今晩は日曜なので例の踏舞があつたが、飽きていたので行かずに勉強し十時に就寝する。

(●第百二十八日目)

七月二十八日 月曜日 快晴

六時起床。七時から十二時まで授業。夕食後、シミット氏とシュツセンハウスを散歩し、一杯のビールに喉を潤して帰る。九時就寝。

(●第百二十九日目)

七月二十八日 火曜日 快晴

午前十一時頃急に雨が降ってきた。七時から十二時まで授業。夕食後、ホツタ氏、ドクトル某氏とサットハウスに散歩する。十時就寝。向井氏から来書、返書を出す。

(●第百三十日目)

七月三十日 水曜日 快晴

六時起床。七時から十二時まで授業。夕食後、シミット氏の部屋で、ヒルトネル氏と共に押し葉を分ける。この日は水曜なので、例のとおり温泉屋で音楽会があつたので人も多く、ちょうど七時頃に皆々帰って行った。シミット氏の部屋は往來に面しており、いろいろな人物が通っていくのが見物で面白。

私とヒルトネル氏〔植物専門家〕はしきりに植物の押し葉を見ているのに、シミット氏は部屋の窓から首を延ばして往來を見ており、婦人が來ると私たちに報告する。我々もまた窓に行つてこれを見る。なかなか忙しい。この地のドクトルは、三十歳以上であつても子供じみており、よほど面白いようである。九時就寝。植物の押し葉は既に二百七十五種類集まつた。

(●第百三十一日目)

七月三十一日 木曜日 快晴

六時半起床。七時から十二時まで、三時から六時まで授業。オーストリアのウイーンにいる向井氏から書状が來る。同氏は暑中休暇になつたので、オーストリアの方へ旅行をしている。宿の主人の部屋でビールを馳走になる。

(●第百三十二日目)

八月一日 金曜日 快晴

午前七時起床。九時から十一時まで授業。大抵の課業は昨日をもつて終つた。暑中休暇となつたためである。今日、宿の会計をする。九時就寝。

(●第百三十三日目)

八月二日 土曜日 快晴

暑氣も激しくなり、日中は散歩に出ることもできない。私の部屋は風通しがよいので、終日勉強するのによい温度である。

この日午前九時に写真を撮らせる。私は今日から上髭を生やすつもりなので、私の顔の変化する前に写真を撮らうと思つた。また校長からの話もあつて、日本の父兄の元に送るためでもある。

午後六時からシミット氏、ヒルトネル氏、セツトウイツ氏〔オーストリアの伯爵で学生、しかし学校には少しも出てこない〕の三人に誘われて、新發明の寫眞術を見物するため、ドレスデンに旅行する。七時頃にドレスデンに到着。夕食をして寫眞術を見る。これは電氣の力を使って、一秒間に二十四回写せる最も速い新發明で、競馬寫眞に馬の足にかかった砂の飛び散る様子までが巧みに写し出されてあつた。珍しい發明と言へる。

その後、イルベ河畔の夜景を見、アウグスト橋畔の音楽場に入つて音楽を聞き、十一時十分の汽車で家に帰つたら、既に十二時頃になつていた。直ちに寝に就く。

同橋畔の夜景は、日本の墨田川兩國橋畔の夜景を彷彿させる。この日は

日曜のためか、川の両畔には無数の瓦斯灯が輝きわたっている。瓦斯灯が水に写る様、汽船の往復する様、音楽の洋々たる様、金波の連々たる様は、無粋な筆をもっては描写することはできない。しかし記憶したい。旅客の身には、良風勝地は、常に故郷を想起させる材料となることを。ああ、わが親、わが友と共に、このような地に遊び、月の朗なるを賞し、水の清きを愛し、長く涼風に吹かれれば、その楽しみは計り知れようか。その期もはなはだ遠くにはないだろう。

(●第百三十四日目)

八月三日 日曜日 快晴

午前八時起床。午後三時からヒルトネル氏と植物採集のため、コス曼城からゾンス村へ、山中を通じてイーデルクロネへと順路を経て七時に帰宅する。山岳をよじ登ったので、体全体に汗をかいた。しかし、時々体を動かすことはかえって健康に益があると思っている。九時就寝。

帰路、イーデルクロネから村人七人と一緒になったので、大いに賑やかになった。

(●第百三十五日目)

八月四日 月曜日 曇天

午前六時半起床。午前九時から十二時まで書を携えて植物園へ行き、その後タールミューラという所に散歩し、牛乳を飲んで帰る。

この日は八時から九時まで一時間授業があっただけで、今日からは全く暑中休暇になった。この日寝衣を一枚作る。日本の浴衣地の上等位のもの、価格は五マルクである。十時就寝。

(●第百三十六日目)

八月五日 火曜日 曇天

七時半起床。二人の友人と共に、タールミューラに散歩し、牛乳を飲んで帰る。同所は山間の谷間で、ただ一軒の粉挽水車がある。牝牛が二三疋

飼われていて、新鮮な牛乳が飲める。しかも、景色がよい所なので、避暑客が多く散歩してくるため、天気の良い日には菓子やビールなども用意される。宿から十八九町の所にある。

(●第百三十七日目)

八月六日 水曜日 快晴

午前七時十分起床。午前、またタールミューラの方へ本を携えて散歩する。帰った所、思いがけない日本人が来訪して私の部屋で待っていた。即ち、岩谷孫造、草加長二郎、湯目某の三氏であって、同氏は暑中休暇中、見物旅行する目的でドレスデンに来て、私がここにいるのを聞いて訪ねて来たという。しかし、私は皆初めての人である。

宿で昼食とビールを御馳走し、その後城跡、植物園から眺望台などに案内し、それから冷水浴場に入った。湯目氏は遊泳をした。四時半から温泉屋の音楽を聞きに行き、七時から同所の踏舞場に入る。三人とも当地の婦人と踏舞をする。一人はなかなか立派に踊れたが、他の一人は余り上手でない。私はハラハラする思いをした。殊に足の短い日本人が背の高い婦人と踊る様は余り立派ではない。これを見ても私は踏舞等は眞平御免である。

三人とも余程の滑稽家とみえて面白い話ばかりである。ドレスデンその他で日本の芝居をしながら、三人共芸人のつもりで旅行中芸を尽くして歩くという仕向である。八笑人、七変人も三舎を避けるような奇談が多い。時としてはアフリカ人となり、時としては欧州人、殊にイタリア人は得意という。

明日は、サクチセイシワイツという当国の有名な山水の勝地に行くというので、私も誘われたが、芸人連中にはちと不向きな私なので、馬の足の役では余り気が進まないのので辞退した。同所で夕食を済ませ、十時半の汽車で三人を見送り、十一時に帰って就寝。

今朝、銚子からの七月四日での書状が届く。

三人とも当地の婦人と近付きになり、沢山話をしたので大いに満足して

帰った。私も久し振りで日本語を話せ、面白い話しや日本の様子などを聞くことができたので、大変楽しかった。

(●第百三十八日目)

八月七日 木曜日 曇天

七時半起床。ミュンヘンのクラスマン氏の父君に手紙を認め出す。午後三時半から、植物園長と共に植物園で植物の葉を採る。夕刻大雨が降り、雹雷があった。九時就寝。

(●第百三十九日目)

八月八日 金曜日 曇天

七時起床。午後四時から宿の主人はじめ八人で、半里程のストレッチベという所の滝見物に出掛ける。滝といっても名前だけで、小さな石川の少し急な所である。しかし山間なので、道の景色はよい。六時頃帰る。九時就寝。

(●第百四十日目)

八月九日 土曜日 曇天

七時起床。午後四時から宿の主人と共にドレスデンへ汽車で出掛け、旅行のための外套(ゴム引で大変軽く、水を通さない物、価格二十八マルク)を買求める。七時の汽車で帰る。夜、宿の主人の部屋でドクトルヒルトネル氏はじめ、近所の者大勢とビールの馳走になる。所望により日本服を着て近所の者に見せる。大いに喜ばれる。十時過ぎまでカルタをして遊ぶ。

(●第百四十一日目)

八月十日 日曜日 快晴

七時起床。明朝出立の準備をする。十二時に終り、午後会計報告をする。第十三報並びに両親への書状、銚子、滝への書状を認め出す。また家と一緒に河原井及び島村様への写真を送る。家への写真二枚はシミット氏が写

したもので、そのほか四枚は去月二十日旅行の際、プロのツフルニッチセーが写したものを貰ったものである。

夕食後、勝島氏へ手紙を出す。最早十時になったので、手紙と写真は明朝出すことにして寝に就く。明朝は家内の者一同ステーションまで見送ってくれるということである。

洋行日誌 大修学旅行の道草

(●第百四十二日目)

八月十一日 月曜日 快晴

午前五時起床。洋傘一本、ゴム外套を携えてステーションへ向かう。私の鞆は宿の下女が持ってくれた。校長ユーグイヒ、教授のイマイステル及びハーテル、その他の卒業生二十九名が集まったので、直ちに六時四十分の汽車でハインスベルグへ向かう。その後、例の狭小鉄道でキプスドルというところに九時十六分に到着する。汽車は皆三等であったが、勢力が盛んなためか、他の客人は皆別室に移ってしまい、学生だけとなったので、馬鹿話をしながら非常に賑やかとなった。キプスドルに到着するやいなや、予てから通知があつたものとみえて、同所の大林区長はじめ林務官一同が出迎えに現われラッパを吹いて私たちを歓迎してくれた。

汽車から降りると、その夜宿泊する宿の部屋割りを林務官から渡された。番号を荷物に記して各自の部屋に届けるようにし、荷物は用意された馬車で送った。校長、教員は御馳走の馬車で、私たちは馬(膝栗毛名馬)でアルテン山林を巡回し、山中で同所の林区所から馳走された昼食をとる。ビールは大樽三本程傾けた。午後四時にアンテンブルグに到着する。

山林の樹木は小さいが、よく形作られている（山のことは面白くないので、ここではざっと書きます）。アンデンブルグは戸数二百程の小山中で、ザクセンで最も高い場所という。私たちの宿屋はデーブリットホテルといって最大の家である。

夕食後、亜鉛の旧坑を教員と共に見物に行く。ここには百年前大きな亜鉛坑があったが、坑に火事があったので多くの人が坑底に埋められて以来、全く廃坑となったという。

この夜八時から私たちの宿で芝居があった。名馬の初日の出陣には少しくたびれていたが、芝居の座は私の部屋の隣なので、見ない訳にもいかず、大枚六十ペンニツヒ（田舎芝居なので安い）を出して一等の切符を買って見物に出掛けた。客の多くは学生であったが、他に田舎娘や子供が百人もいた。外題は「香りの木の葉」とでも訳すべきもので、本舞台一面に縦の木が敷き詰められていた。舞台の左の方には寝台の端が見え、机や椅子の配置など全て貴人住居の体裁である。

拍子木が鳴って幕が開くという所だが、だんまりで幕は開かず（幕自体がない）、突然奥の方から一人の娘が走り出てきて部屋をのぞき、「マンマ、マンマ（母様、母様）」というところは、何だか日本人には張り合いがない。一幕は三十分から五十分位で四幕あった。十時半に終り、直ちに寝に就く。

（●第四百十三日目）

八月十二日 火曜日 細雨

七時五分出立。アンデンブルグ林区を巡回する。この辺は高地のため氣候が悪いので、直径六寸ないし八寸位の松及びトウヒ林で大木はない。レヘルトという所で昼食の馳走になる。

同所で石炭の製造所を見学する。丘の下を二町余りも遠く坑を掘って、その奥から石灰岩を切り出し、焼いて石灰とする。

皆々蠟燭をつけて細い坑を通って行くと、奥の方は大きな家の中に入ったようで、所々に岩の柱が切り残されて、切り出した様子が分かり、何だ

か恐ろしい風景である。殊に寒気が骨に徹し、水滴が衣服を湿すのは良い心地がしない。いわんや一回崩壊すれば、三十名余の青年が坑に埋没されると考えると、臆病風が身に染みて、地質の教師が鉄槌でもって打ちながら説明をしてくれても耳には入らず、「千金の身は危うきに近寄らず」などと勝手なことを言つて草々に逃げ出して来た。

同所にてドクトルシミット氏、及びその他ターラントの学友に手紙を出す。それから六町程離れた所へ行って、御獵御殿を見る。これはザクセン国王が獸獵に来るときの家で、鹿の角や獵銃などが展示されており、立派な建物である。欧州人は獸獵を無上の快樂とし、「私は今夕、どこそで一匹の鹿を見た」と話せば、世界一の美人でも見たと言ふような話になるほどである。そのため何処の山林でも鹿や兎を養っていないところはない。これを養うだけでも多くの金を要する。たとえば、農場に出ないように柵を囲い、冬間は枯れ草を与えるなど種々厄介である。

森林官が私に対してのご追従として、「何時でも日本には鹿がいますか。貴方は鹿をなさいますか」と決まり文句を言う。殊におかしいのは、御殿内に掛けた鹿の角には、何処の国王または何太子が、何年何月何山で射たなどと大業に記してあることである。鹿を射るのが何の手柄だ、余り面白くないので、森林官の例の問いに対して、「私は射を好まない。生き物を殺して楽しみとすることは、私の好まない所である」と答えた。これには、一言も返事がなかった。しかし私も余り処世の方に通じないのは頑固な答えだと思つた。

それから、同所の大林区所を経て、三時半にモルデル村に着く。ここはオーストリアとドイツ国の境で、税関がある。皆荷物物の検査を受ける。四時十分同所発の汽車で、アイヒワルドに向かつて出発する。ここでザクセン国から送りに来た森林官と別れた。

車上から見るところは皆山林で景色が良い。四時半頃アイヒワルドに到着する。ステーションには同所の大林区長ホルヘルト氏はじめ、林務官などが馬車を用意して出迎えてくれた。私たちは荷物をその馬車へ託して歩いた。道が大変美しく、日光街道の並木道を歩いているような思いで

あった。十町余り歩いて、バートホテルに到着する。同所は今ではオーストリア国になって居るが、昔はベーメン王国で、森林は今なお同王、つまりクラリア候に属するため、同候の命により私たちを厚く招待していただくことになった。その丁寧なる様には恐れ入った。

宿は当地一等のホテルで、食事は海山の珍味を供え、食事には当地の林務官一同が陪食し、宿も酒も一切無料となったので、学生らの強飲、我儘は普段の様子とまったく違ってしまった。

当所はターラントのように山間の景色のよい小市なので、夏は避暑客が来ることも多く、私たちの宿もそのために作ったものである。私の部屋が七十二号室ということからも、その広大なことが分かる。私の部屋は一人部屋で、眺望景色とも良い所である。九時就寝。

(●第四百四十四目)

八月十三日 水曜日 曇天

六時半起床。七時十五分出立。林区長の案内で同所の鋸工場を見学する。蒸気力で板を挽き、箱を作る手際には感心した。その後規則正しく並んだ美しい山林を見回り、一時にミユツケレ塔で昼食の馳走になる。歌を歌い、ビールを飲み、三時半まで同所で遊び、六時五分宿に帰る。

同塔は、テフリッツという大市の近くで、高い山の上に作った一軒の料理屋で、眺望が最も良いところである。欧州の風習で、景色のよい所に着くと、親族友人にその所の絵の付いた葉書を出すことになっている。学生たちも皆書いているので、私も思い出にと日本の父上及び松野教授に葉書を出した。着いただろうか。葉書に貼った切符は、校長のユーダイヒ氏から、日本に出すなら私が切符を上げようといつて頂いたものである。

七時から八時半まで昨日のように会食の馳走になる。その後部屋に帰って日記を認め、十時に就寝。

昨日からはドイツの通貨は使えず、オーストリアの通貨でグルデンという。日本の紙幣と同じような紙幣で、二十マルクを交換すると十一グルデンになる。およそ一グルデン一マルク八十文程に相当し、日本の六十銭程

に当たる。しかし一グルデンの価値は、日本の十銭札位である。例を挙げれば、昨朝誤って私の一泊の代金と夕食と朝のコーヒー代の書付けを持参したが、これを見ると十七グルデンとなっていた。馬鹿に高いと思っていた。しかし、私もターラントの学生であれば、払いは皆クラリヤ候がしてくれるものと思ひ、再び書付けを持ち去った。

(●第四百四十五目)

八月十四日 木曜日 曇天

六時起床。昨日の残りの山林を巡回し、午後一時トウベンベルグという所の動物園で用意してあった昼食の馳走になる。同所では山林局長の婦人、令嬢と会食した。私は、教授イマイステル氏により婦人等に紹介された。同教授の勧めにより、私は洋傘の上衣(こうもり傘の上包み)を日本品の記念にと同婦人に贈った。そして名札の裏に日本字で、「日本帝国本多静六千八百九十年八月、枢密顧問官ユータイヒ及び教官、学生等と山林旅行の際この地に至る。山林局長ホルヘルト氏の誘導を受け、丁寧なおもてなしを受け大いに満足しているところである。ここにその厚意を記念とする」と記し、さらにドイツ語でもって訳したところ大いに喜ばれた。同令嬢からは、胸に掛けていた薔薇の花を贈られ、大いに面目が施された。

日本人の私には、薔薇の花を贈うことは何の感激もないが、この地の学生は非常に面目に思うようで、満場の喚声が沸き上がった。

また、他の山林官らは皆自分の名札を持って来て、私に日本字で自分の名前を記すようにと請われた。十枚程、勝手な字をもつていい加減に書いてやった。例えば、ホルヘルトは保留辺流土などと書いてやったところ大変喜ばれて、子々孫々家の宝にするというほどであった。何故ならば、この辺に日本人が来たのは、私が初めてだからである。

日本字で名前を書いてくれと請われること、本に名前を書いてくれといわれることは、ここばかりでなく、毎日実にくるさい程で食事の暇もない位であるが、これも私の名前が残ることを思い努めて記すようにしている。このため、若し日本人で私が旅行した地方の名勝地、眺望等に旅をする者

がいれば、必ず私の名前を告げる者があるだろう。恐らく私は生涯再びこの辺の山中に来ることはないだろう。

ここから十町程進んだテープリツワイデル停車場から、二時五十分の汽車でボーデンパツハに向かつて発つ。

前掲の昼食の所は野獸動物園ともいべき所で、大きな園と池がある。鹿は種類数共多く養い、池には鯉が沢山泳いでいる。一軒の茶屋があり、樹木鬱蒼として景色が良いため、都会の人が散歩にくる所である。

車窓からはベーメン国の中央山脈を眺められる。汽車は常にベーメン国とザクセン国の境のシネーベルグという山脈の麓をめぐるつて進んで行く。晴れ渡れば大いに良い眺めである。

四時二十分ボーデンパツハに到着。同所の大林区長及び林務官等の出迎えを受ける。直ちにホテルポストという宿へ向い、衣服を改めた後、大林区長の案内で、同所の植物園を見学する。当市はかなり大きな市で、イルベ川に沿い、一つの珍しい鉄の鎖で吊つた大橋を隔ててテーツヘン市がある。景色のよい所である。

この夜音楽会があるということで誘われたが、遅くなるので辞退して日記を認める。私は夜九時半になれば、就寝の時間が来たと言つて帰ることを皆知っているので（この国の学生は、通例十二時位までビールを飲んでゐることは平気なので、十時に寝ると言うことは非常に格別に聞こえるようである）、大いに都合がよく、十時後になる所には本多は同行しないということが、自然と確定しているのである。

（●第四百四十六日目）

八月十五日 金曜日 曇天

六時起床。汽船で一同二里程イルベ川を遡る。その後上陸、一つの山林を巡回する。この山の上からは、眼下にイルベ川がめぐりめぐり流れ、その岸に沿つて小さな町並みが点在している様子がよく眺められる。山の頂上に一つの穴がある。常に天然の水がある。私たちは穴の中の水を取つたが、土が混じつていたので、食べることはできなかった。そのため一層喉

の乾きを覚えた。山を降りた所に昼食が用意してあった。このビールは格別旨く味わえた。山中に新しく机を作り、ビールや昼食を持参したのである。

その後、午後三時に元の所から汽船に乗つて四時過ぎ宿に帰る。衣服を改めた後、大林区長の案内でテツヘンの城を見学する。美しい庭園があつた。庭の中には日本の杉苗橋の類及び桃等があつた。九時就寝。

（●第四百四十七日目）

八月十六日 土曜日 快晴

六時起床。十台の伴奏馬車でシネーヘルグに登る。林中であつたが道路も良く出来ていて、山道をめぐりめぐつて山の頂上まで馬車で登ることができた。山林は大変立派である。

山の頂上に一つの眺望台があつた。高さ十五間程もあるので、これに登るのに風のため崩れはしまいか恐ろしい心持ちがした。しかし景色は良く、ザクセン国とベーメン国の大部分を眺めることができた。山の高さは四百間程あつて、ベーメンとザクセンの境で最高の山という。

頂上の茶屋にはすでに昼食の用意がしてあり、ビールを飲み歌を歌う。また馬車を使つて六時頃に帰る。馬車の山巡りなので、山林官も楽なものである。我々の馬車も官からのもので、船賃、昼食等ことごとく皆馳走になつた。ここでは宿の払いと朝夕食だけは各自で払つた。当地には三泊した。

（●第四百四十八日目）

八月十七日 日曜日 快晴

五時半起床。六時四十五分発の汽車で、オガシ市を経て（この間ザクセン国を横切り）、フェルストルフという所に三時半に着く。同所では、プリンケナウの山林官が馬車六台を用意して出迎えていたので、その馬車に乗つて五時頃プリンケナウに着く。

当市は小さな田舎市であり、プリンケナウ候の城がある。しかし砂原の